哲学コース　推薦図書一覧

＊　ここに挙げた翻訳が入手できない場合は、図書館やネット古書店などを利用するか、同じ著作の別の翻訳を用いてもよい。なお、英語が得意な人は、Project Gutenberg というサイトから英語原文（英語以外の言語の場合は英訳）が無料で入手できる場合があることを覚えておくといい。

＊　＊　＊

►『聖書　新共同訳』日本聖書協会

＊　ユダヤ教、キリスト教に関心がある人は、へたな解説書を読むより、聖書そのものを熟読してみよう。その上で、註解を求める人は、『旧約聖書略解』『新約聖書略解』（日本キリスト教団出版局）を参照するといい。特に新約聖書について、歴史学的・文献学的に正確な知識を獲たいと思う人には、田川建三『書物としての新約聖書』（勁草書房）を薦める。

►プラトン（田中美知太郎訳）『ソクラテスの弁明』『クリトン』『パイドン』（中央公論社『世界の名著6　プラトン』所収）

＊　最晩年のソクラテスの実像をかなり忠実に描いたものと認められている。『世界の名著』は現在絶版だが、この 3 作を 1 冊に収録して便利なこと、田中訳が正確でしかも読みやすいことが優れているので、古書店などで探してみてほしい。新潮文庫に同じ 3 作が同じ田中美知太郎の訳で 1 冊本で出ているが、ギリシャ語の長音表記が煩わしくて少し読みにくい。

►プラトン（藤沢令夫訳）『国家』（上下 2 冊）岩波文庫

＊　本書に登場するソクラテスは、上記作品とは一転して、プラトンの操り人形だと見なされている。イデア論、哲学の理念、哲人王思想を大々的に語った、プラトンの主著といってよい。

＊　倫理学演習・講読 I テキスト

►プラトン（久保勉訳）『饗宴』岩波文庫

＊　美を思慕する愛（エロース）の働きについての古典的思索。

►プラトン（藤沢令夫訳）『パイドロス』岩波文庫

＊　芸術についてのプラトンの肯定的なとらえ方が開陳されている。『国家』で展開される「詩人追放論」での否定的芸術観と併せて読んでほしい。

►アリストテレス（渡辺邦夫・立花幸司訳）『ニコマコス倫理学』（上下 2 冊）光文社古典新訳文庫

＊　西洋倫理学の古典中の古典。なにげない記述の中に倫理学の主要な問題が詰め込まれている。最初は「なんだこんなもんか」と思っても、あとで読み直してみると「あれ、こんなこともちゃんと書いてある」と気づかされる。

＊　倫理学演習・講読 I テキスト

►アリストテレス（岩崎勉訳）『形而上学』講談社学術文庫

＊　ハイデガーは西洋哲学全体を「形而上学の歴史」と見なした。その原点。現存するアリストテレスの作品はどれも講義録であり、時に散漫でわかりにくいが、以後 2500 年間の哲学の方向性を決定したほどのすぐれた洞察がどこにあるのか、探してみよう。上記訳書は翻訳は優れているが現在絶版なので、とりあえず目を通してみようと思う人は、入手しやすい岩波文庫版を手にとって見るのもいい。

►アリストテレス（桑子敏雄訳）『心とは何か』講談社学術文庫

►アリストテレス（松本仁助訳）『詩学』岩波文庫

＊　悲劇創作論の古典。美や芸術に関する一般的な所見も含む。悲劇鑑賞の効用としての「カタルシス」論も出てきます。ウンベルト・エーコの『薔薇の名前』を読む前に、是非一読を。なお、本書にはホラティウスの『詩学』もおさめられている。

►エピクロス（出隆・岩崎允胤訳）『エピクロス――教説と手紙』岩波文庫

►マルクス・アウレーリウス（神谷美恵子訳）『自省録』岩波文庫

►プロティノス（田中美知太郎、水地宗明訳）『エネアデス（抄）』（上下 2 冊）中公クラシックス

＊　新プラトン主義の古典。プラトンとアリストテレスの媒介、古代ギリシャ思想とキリスト教神学の媒介、神秘主義への影響などの点で、哲学史的に 重要な意味を持つ。「美について」「叡智的な美について」は、美学的な考察として興味深い。

►アウグスティヌス（服部英次郎訳）『告白』（2 巻）岩波文庫

►トマス・アクィナス（山田晶抄訳）『神学大全』（中央公論社『世界の名著 20 トマス・アクィナス』所収）

＊　本訳書冒頭の、山田氏による解説は、わかりやすくていい。この解説にも描かれている、トマスの最晩年に起こった体験は、何を意味しているだろうか?

►マイスター・エックハルト（相原信作訳）『神の慰めの書』講談社学術文庫

＊　この本がどういう本かを知るには、末尾近くに付された 4 頁ほどの短い“「学術文庫」のためのあとがき”を読んでみるといい。私たちがこの本を文庫で手軽に読めるのは、ひとりの女性がこの本から受けた深い体験のおかげなのである。

►道元（水野弥穂子校注）『正法眼蔵』（4 巻）岩波文庫

＊　数ある現代語訳はどれも質が悪い。多少苦労しても古文原文と格闘してみる方がいい。90 以上の文書の集積で、どれを読んだらいいのか途方に暮れる人もあろうが、そういう人は冒頭の「辨道話」をとりあえず読もう。序論であると同時に道元思想の到達点を示す文書でもある。

►親鸞（金子大栄校注）『歎異抄』岩波文庫

＊　解説を求める人には、暁烏敏『歎異抄講話』（講談社学術文庫）を勧める。

►ニコロ・マキアヴェリ（池田廉訳）『君主論』中公クラシックス

►ニコラウス・クザーヌス（山田桂三訳）『学識ある無知について』平凡社ライブラリー

►ニコラウス・クザーヌス（八巻和彦訳）『神を観ることについて　他二編』岩波文庫

＊　エックハルトと並んで「ドイツ神秘主義」の頂点をなす人だが、より実践的・教導的なエックハルトに対し、より思弁的性格が強い。

►マルティン・ルター（石原謙訳）『キリスト者の自由・聖書への序言』岩波文庫

►フランシス・ベーコン（桂寿一訳）『ノヴム・オルガヌム――新機関』岩波文庫

►ルネ・デカルト（野田又夫訳）『方法序説』中公クラシックス

►ルネ・デカルト（井上庄七・森敬訳）『省察』中公クラシックス

＊　すべての近代哲学はここから始まった。同意するにせよ批判するにせよ、一度は読んでおきたい基本中の基本文献。

►ルネ・デカルト（谷川多佳子訳）『情念論』岩波文庫

＊　いわゆる心身問題の端緒となった書物。近代の情念論（感情論）の源流でもある。デカルトの人間洞察の鋭さも味わえます。

►バルフ・デ・スピノザ（畠中尚志訳）『エチカ』（2 巻）岩波文庫

＊　幾何学的論述形式は、安易な読者をはねつけるための壁。これにひるまず丹念に内容を読み取る苦労を惜しまない人には、ヘーゲルやニーチェに巨大な影響を与えた巨人的思想が姿を現わす。

►ブレーズ・パスカル（前田陽一・由木康訳）『パンセ』中公文庫

►トマス・ホッブズ（水田洋訳）『リヴァイアサン』（全 4 冊）岩波文庫

＊　〈国のために国民がいるのではなく、国民のために国はあるのだ〉と宣言した社会契約説の源泉。国は国民の意志を反映するはずだという人格論など、矛盾をなんとか回避しようとする(?)概念装置も興味深い。

＊　第 1 巻・第 2 巻は倫理学演習・講読 II テキスト

►ジョン・ロック（大槻春彦訳）『人間知性論』（全 4 冊）岩波文庫

►ジョン・ロック（加藤節訳）『統治二論』岩波文庫

＊　後者は、立憲君主制を確立する社会契約説の古典。財産のみならず生命・健康・自由をも含む概念「プロパティ」を、従来の「所有[権]」ではなく「固有権」と訳すなど、最新の学術的成果を盛り込んだ完訳。

＊　『統治二論』後編は倫理学演習・講読 II テキスト

►ジョージ・バークリ（大槻春彦訳）『人知原理論』岩波文庫

►デイヴィド・ヒューム（木曽好能ほか訳）『人間本性論』（全 3 冊）法政大学出版局

►ジェレミー・ベンサム（山下重一部分訳）「道徳および立法の諸原理序説」（中央公論社『世界の名著 49 ベンサム/J.S.ミル』所収）

＊　功利主義（公益主義）の出発点となった古典。主に刑法の基礎づけを目指している。後半部分は要約のみで、全訳はない。淡々とした記述にベンサムの自信のほどがうかがわれる。

＊　倫理学演習・講読 II テキスト

►G.W. ライプニッツ（清水富雄・飯塚勝久・竹田篤司訳）『モナドロジー・形而上学叙説』中公クラシックス

＊　この人の思想の「すごさ」がわかるようになったら一人前、というのが私（仲原）の持論です。カントはこの人の思想に対してコペルニクス的転覆を企てたわけだけれど、いいや今でもこの人の思想は転覆していない、という論文を、誰か書きませんか。

►イマヌエル・カント（天野貞祐訳）『純粋理性批判』講談社学術文庫

＊　邦訳ないし解説書には各種あるが、どれも一長一短。天野訳は、最も古い翻訳のひとつで、文語調が読みにくい欠点はあるが、正確さという点では、いまだにこれを凌駕するものはない。だいたいが、ドイツ人ですら頭を抱えるような難解なドイツ語が、翻訳でわかりやすくなっていたら、それはカントの文章を再現していない翻訳だということになる。人間理性が到達した最高峰のひとつに、苦労してででも自分も登ってみたい、と思う人がいたら、翻訳は参考程度にしておいて、ぜひドイツ語原文と格闘してみられたい。

►イマヌエル・カント（土岐邦夫・観山雪陽・野田又夫訳）『プロレゴーメナ／人倫の形而上学の基礎づけ』中公クラシックス

＊　『プロレゴーメナ』は『純粋理性批判』の「準備作業」として、『人倫の形而上学の基礎づけ』は『人倫の形而上学』の基礎である『実践理性批判』への序論として、それぞれ書かれ、カントの哲学のエッセンスが凝縮されている。

＊『人倫の形而上学の基礎づけ』は他にも『道徳形而上学の基礎づけ』『道徳形而上学原論』等の書名で翻訳が多数あるが、中山元訳『道徳形而上学の基礎づけ』（光文社古典新訳文庫）が倫理学演習・講読 I テキスト

►イマヌエル・カント（牧野英二訳）『判断力批判』岩波全集版第 8、9 巻

＊　訳本はいろいろありますが、訳語・訳文の問題が少ないのはこれ（とくに岩波文庫の S 氏訳は混乱のもとです・・・）。第 1 部「美感的判断力の批判」は哲学的美学思想の古典。第 2 部は、目的論における判断力の働き

についての考察。

►ジャン・ジャック・ルソー（桑原武夫・前川貞次郎訳）『社会契約論』岩波文庫

►G.W.F. シェリング（西谷啓治訳）『人間的自由の本質』岩波文庫

＊　この書「は、シェリングの最も円熟した時期を代表する著作であると共に、例えばクーノー・フィッシャーによって「哲学的文献全体のうち最も深く考えられたものの一つ」と評されたものである。「シェリングは幾多の輝かしい思想の峯を越えて、この書に至って最も高い頂に達した」（訳者緒言）。翻訳は厳正にして的確、信頼してよい。

►G.W.F. ヘーゲル（樫山欽四郎訳）『精神現象学』（全 2 冊）、平凡社ライブラリー

►G.W.F. ヘーゲル（武市建人訳）『哲学入門』岩波文庫

＊　ヘーゲルは自身の哲学を、西洋の歴史全体の頂点であり完成であると考えた人。これをただの誇大妄想と見なして片付けたのでは、この人が及ぼした巨大な影響は理解できない。上記二著は、こうしたヘーゲル哲学の世界に、ヘーゲル自身が読者を導き入れるために書いた書。後者がとりわけ優れたヘーゲル哲学入門であることについては、本訳書の「訳者の序」を見られよ。

►G.W.F.ヘーゲル（長谷川宏訳）『美学講義』（3 巻）作品社

＊　芸術哲学の古典。訳文が砕け過ぎとの批判があるものの、もともとが講義の、弟子による筆記ですし、ヘーゲルの思索のダイナミズムをつかむのには好適。翻訳は他に岩波書店全集版に竹内敏雄訳があります。

►アルトゥール・ショーペンハウアー（西尾幹二訳）『意志と表象としての世界』（3 巻）中公クラシックス

＊　この人、頭いいなあ、というのが素直な感想。「世界は私の表象である」「世界は私の意志である」というたった 2 つのテーゼから、道徳や芸術や宗教までをも含む現実のすべてを説明してみせる。

►フリードリヒ・ニーチェ（秋山英夫訳）『悲劇の誕生』岩波文庫

►フリードリヒ・ニーチェ（吉沢伝三郎訳）『ツァラトゥストラ』（2 巻）ちくま学芸文庫

►フリードリヒ・ニーチェ（信太正三訳）『道徳の系譜』ちくま学芸文庫

＊　ニーチェの本はどれを読んでも知的刺激を与えてくれるけれど、上記 3 冊以外のものは「アフォリズム」形式が壁になって、理解しにくい面がある。この 3 冊は、他の著作を併読しなくてもとりあえず理解可能という点で、入門には好適。

►アンリ・ベルクソン（真方敬道訳）『創造的進化』岩波文庫

►アンリ・ベルクソン（平山高次訳）『道徳と宗教の二源泉』岩波文庫

＊　人間を「生物」としてとらえた上で、その生の意味について、あるいは道徳や宗教について考えてみたい人に、推薦。

►ジョン・ステュアート・ミル（川名雄一郎・山本圭一郎訳）「功利主義」（京都大学出版会『J.S.ミル功利主義論集』所収）

＊　「満足した豚よりも不満を抱えた人間の方がよく、満足した愚か者よりも不満を抱えたソクラテスの方がよい」。快楽は量よりも質が大事と主張し、功利主義を擁護しながら同時に功利主義の困難も描き出してしまった、念入りな問題作。

＊　倫理学演習・講読 II テキスト

►ジョン・ステュアート・ミル（山岡洋一訳）『自由論』日経 BP クラシックス

＊　個人主義的自由主義の古典。個人の自由はどこまで認められるか、議論はなぜ必要か、個性はなぜ大切なのかといった、当たり前のようで実はあまり深く考えられていないことを、徹底的に考え抜いている。

＊　倫理学演習・講読 II テキスト

►セーレン・キルケゴール（桝田啓三郎訳）『死にいたる病』ちくま学芸文庫

►チャールズ・サンダース・パース（伊藤邦武訳）『連続性の哲学』岩波文庫

►ウィリアム・ジェイムズ（桝田啓三郎訳）『プラグマティズム』岩波文庫
►ウィリアム・ジェイムズ（桝田啓三郎訳）『宗教的経験の諸相』岩波文庫
＊　後者は宗教心理学の古典。宗教体験とはいかなる心理状態であるかを豊富な実例で理解させてくれる。心理学的方面に関心のある人には、同じ著者の『心理学』（2 巻、今田恵訳、岩波文庫）も参考になる。

►ハートランド・ラッセル（高村夏輝訳）『哲学入門』ちくま学芸文庫
►バートランド・ラッセル（石本新訳）「外部世界はいかにして知られうるか」『世界の名著 70 ラッセル・ウィトゲンシュタイン・ホワイトヘッド』中公バックス

►ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン（野矢茂樹訳）『論理哲学論考』岩波文庫
►ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン（大森荘蔵・杖下隆英訳）『青色本・茶色本』大修館書店

►コンラート・フィードラー（山崎正和、物部晃二訳）「芸術活動の根源」中央公論社（『世界の名著 81　近代の藝術論』所収）
＊　20 世紀初めの「芸術学」導出の端緒となった古典的論考。日本（とくに京都）では西田幾多郎が早くから注目したことで知られる。心身問題の一 展開としても読める。なお、世界の名著 81 巻には、ハリソン、コリングウッド、ヴェルフリン、パノフスキーらの芸術学初期の成果も納められている。残念ながら復刊されていないので、古書で探してください。

►エトムント・フッサール（浜渦辰二訳）『デカルト的省察』岩波文庫
►エトムント・フッサール（細谷恒夫・木田元訳）『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中公文庫

►ヴィルヘルム・ヴォリンゲル（ヴォリンガー）（草薙正夫訳）『抽象と感情移入』岩波文庫
＊　気候風土と芸術作品の形式（抽象的様式や有機的形態）の関係を論じた大胆な文化論。和辻の風土論と対比してみるのも面白い。

►マルティン・ハイデガー（細谷貞雄訳）『存在と時間』（2 巻）ちくま学芸文庫
＊　この人の思想は、ドイツ語の言語構造に完全に依存しきった独自の言葉で語られるため、言語的に親近性のある英語やフランス語にすら翻訳不可能な箇所が無数にある。上記翻訳を推薦するのはあくまで暫定的にであって、本気でこの人と取り組むならドイツ語原語で読むことが必須。
►マルティン・ハイデガー（関口宏訳）『芸術作品の根源』平凡社ライブラリー
＊　ハイデガー後期存在論の劈頭を飾る論考。もちろん芸術論としても興味深い内容です。弟子のガダマーによる解題的論文も収められているので便利。

►西田幾多郎『善の研究』岩波文庫
＊　日本で最初の独創的哲学として名高い本。処女作ということもあって荒削りな点も多いが、あらゆる問題について、他人の解決を鵜呑みにせず、自分で納得できるまでとことん考えなおしてから書く、という態度を貫いている点は立派。

►九鬼周造「偶然性の問題」燈影舎（京都哲学撰書第5巻　九鬼周造『偶然性の問題・文芸論』所収）
＊　必然性の裏面としての「偶然性」の問題が、さまざまな角度から考察されている。難しいけれど、魅力的な本です。文芸論と併せて読めば、九鬼が 明敏な哲学者であって、かつ繊細な美学者でもあったことがわかるはず。なお、「偶然性の問題」は、2012 年 11 月に岩波文庫にも登場しました。
►九鬼周造『西洋近世哲學史稿』（上・下）岩波書店（九鬼周造全集第 6・7 巻）
＊　九鬼が京都大学で行なった近世哲学史講義の草稿を編集したもの。全集版でしか読めない、入手困難な

書だが（古書店には割によく出ている）、近世哲学史に関する最良の概説書のひとつ。

►九鬼周造「ハイデッガーの哲学」（『人間と実存』所収、岩波書店、九鬼周造全集第 3 巻）

＊　ハイデッガーの『存在と時間』の「要点の極めて的確な解説であり、初めてハイデッガーを読む人々には第一に奨められるべき文献である」（辻村公一）。

►西谷啓治『ニヒリズム』創文社（単行本は絶版、現在は同じ創文社の『西谷啓治著作集』第 8 巻に所収）

►西谷啓治『宗教とは何か』創文社（同じく現在は『西谷啓治著作集』第 10 巻）

＊　前者はニヒリズムについての優れた解明であると同時に、ニーチェやハイデガーの哲学に関する優れた解説を含んでいるのが有意義。後者はやや禅仏教に傾斜しすぎているきらいはあるが、宗教の本質についてじっくり考えてみたい人にとっての必読古典。

►ジャン＝ポール・サルトル（松浪信三郎訳）『存在と無』ちくま学芸文庫（3 巻）

＊　ちょっと読んだだけでは何を言っているかまるでわからない本だが、サルトルを読むコツは、わからなくても気にせず区切りまで読み進んでおいて、2 度・3 度と繰り返し読むこと。すると、時間はかかるが、徐々にこれが途轍もなく面白い哲学であることが見えてくる。

►モーリス・メルロ=ポンティ（中島盛夫訳）『知覚の現象学』法政大学出版局

＊　みすず書房の翻訳より正確でしかもわかりやすい。といっても程度問題で、原文自体が難解で定評のある本だが、現象学運動に一大転機を生み出した名著である。

►和辻哲郎『人間の学としての倫理学』岩波全書

►ジョン・ロールズ（川本隆史・福間聡・神島裕子訳）『正義論（改訂版）』紀伊國屋書店

＊　価値や道徳の言葉を分析することから、公正な社会の模索へと、現代倫理学を再転回させた力作の新訳。〈不平等な扱いは最も不遇な人々の状況を改善させるためにだけ認められる〉という主張は、格差がますます拡大する今日の社会に対してこそ強く響き渡る。

►ピーター・シンガー（山内友三郎・塚崎智監訳）『実践の倫理（新版）』昭和堂

＊　動物虐待、人工妊娠中絶、安楽死、南北格差、地球環境など、主に生命に関わる今日的諸問題に対し、功利主義の立場から首尾一貫した回答を行う。倫理学的議論のおもしろさとあやうさを十二分に味わえる刺激的な書。

＊　第 7 章のみ人間文化基礎論 I(a)テキスト

►清水幾太郎『論文の書き方』岩波新書

＊　著者は社会学者だが、書かれている内容はあらゆる分野の学術論文に普遍的。いまだに類書の中で最もすぐれたもののひとつ。